



ベストティーチャーの悩み

現在勤務している大学に着任したその年に「ベストティーチャー賞」を受賞したのは、まさに光栄の極みでした。これは学生による授業評価に基づいたもので、受賞科目として選ばれた授業は受講者数が200名を超える教職科目でした。一般的に、規模が大きくなればなるほど授業評価の平均値は下がる傾向にあると耳にしますが、当時、私が担当していたその科目の授業評価の得点が、他のいくつかの大規模な授業の中では高い方の「外れ値」だったことから機械的に選考に残った、という次第です。

それからしばらく経ちますが、未だに受賞を引き合いにだされることがあります。しかし、そもそも「授業が上手い」とは一体どういうことなのでしょうか。授業準備のため勉強し直すたびに自分の浅学さを思い知らされるばかりで、授業の得手不得手まで考える余裕がもてない、というのが正直なところです。しかし、ここで個人的な悩みを吐露したところで詮無きことです。今回は、私が普段行なっている授業をかいつまんでお伝えしますので、とりあえずその雰囲気を感じていただければと思います。

顔と名前を覚える

たとえ数百名を擁する講義であったとしても、私は極力、授業中に学生とのやり取りを差し挟むようにしています。質問の内容は簡単なものばかりですが、必ず名前を尋ねてから話し掛けます。また、毎回の授業終了時に簡単な感想を書いてもらい、実名を挙げて次週にその一部を紹介するのですが、ここでも感想が紹介された学生と簡単な

会話を交わします。こうしたことを繰り返していくと、さすがに全員を覚えることは困難ですが、学生の顔と名前を徐々に一致させることができます。

学生の顔と名前を覚えるようにしているのは、授業をルーティンワークとはみなしたくないという、その一点に尽きます。毎年、大半が異なる学生を相手にするわけですが、担当科目が変わらない限り、コンテンツに劇的な変化が生じることはまずありません。だからこそ、毎年顔ぶれが変わる相手をしっかりと意識しながら授業に臨みたいのです。また、学生とのやり取りを重ねると授業の雰囲気が良くなりますし、語り口にも自然と熱がこもります。

遊びのあるコンテンツ

授業のマネリ化を防ぐために、他にも心掛けてことがあります。それは、テーマの選定方法と独創的なコンテンツ作りです。

まず、教養科目のような自由度の高いものでは、授業で扱う内容を学生による投票で決めるようにしています。授業の最後に次週扱う予定のテーマを二つ示して、得票数が多かった方を解説する、という方式です。図は、ある授業の投票結果から抜粋したものです。ダブルスコアで片方が圧勝することもあれば、「感情 vs 記憶」





Profile — 澤田匡人

1998年、筑波大学人間学類卒業。2003年、筑波大学大学院心理学研究科博士課程修了。博士（心理学）。宇都宮大学教育学部講師などを経て、2007年より現職。専門は感情心理学、発達心理学、社会心理学。平成17年度宇都宮大学ベストティーチャー賞、平成21年度宇都宮大学ベストレクチャー賞を受賞。主な著書は、『子どもの妬み感情とその対処』（単著、新曜社）、『自己意識的感情の心理学』（分担執筆、北大路書房）、『キーワードコレクション社会心理学』（分担執筆、新曜社）など。研究室サイトのURLは <http://schadenfreude.jp/>

のようにいい勝負になる場合もあります。また、投票の傾向は、開講年度や授業の流れによっても大きく左右されます。結果、毎年「異なる」授業を行わざるをえなくなります。

一方、「感情心理学特講」のような専門科目では、テーマ投票を採用しない代わりに、独創性の高いコンテンツを前面に打ち出します。最近の例を挙げると、「他人の不幸はなぜうれしいのか?」という一つのテーマを巡って、さまざまな観点から論じるというものがあります。たとえば「邪なスイーツ」と題した回では、あたかも美味しいものを食するかのよう他人の不幸が好まれ、ともすれば笑いを誘うメカニズムを、色々なスイーツになぞらえて解説します。「破顔のマカロン」では、笑いといっても様ではなく、作り笑いや苦笑、嘲笑など、その多彩さに言及します。また、「愉悦のソルベ」は、優越性や認知的なズレを知覚した瞬間にこそ、笑いの前提となるユーモアが生じるとみなす諸説の紹介、といった具合です。

一行に託す思い

教科書は用いない主義なので、授業はスライドだけで勝負しています。そのせいか、色使いやアニメーションといった「見せ方」について注目されることが少なくありません。

しかし、私がスライド作りで最も腐心しているのは、そういう派手なところではなく、「全ての解説を一行で示す」、ただそれだけなのです。通常、正確さを期すのであれば、どうしても文章が長くなりがちですから、それを短く、しかも一行に絞るなど至難の業のはずです。ただし、上首尾にいけば一文がすぐに目に飛び込んできますから、ノートテイクがしやすくなるという利点が見込めます。加えて、文章や図を徐々に呈示していくことで、授業の進行速度を

御しやすくなるもなります。アニメーションは派手な演出のためというより、こうしたことに一役買っているに過ぎないのです。

なお、1回の授業で説明に用いるスライドは、5、6枚が限界と感じています。なぜなら、ノートテイクの速度を考慮すると1枚につき15分弱が適当と思われるからです。当然のことながら、解説に際しては話術といいますかメリハリのある話し方も不可欠でしょう。語りとスライドが渾然一体となることによって、苦心して絞り出した「一行」がはじめて活かされるのだと信じています。

わかりやすさへの挑戦

私は、シラバスに「賞に恥じぬように全力を尽くします」などと臆面もなく明記してしまっていることがあります。もちろん、受賞を鼻にかけてのことではありません。私にとってシラバスとは、授業の見せ方とコンテンツの両方について最小限の文章で記した決意表明、より大きさに言うならば、自分に対する「挑戦状」だからこそ、そう書きたい衝動に駆られるのです。

とはいえ、シラバス（＝挑戦状）が後々厄介な事態を生み出すこともあります。とりわけ、毎年のようにコンテンツを刷新するとなれば、文献を手当たり次第に読み漁り、やっとのことでスライドを作り終えたと思ったのも束の間、また次の準備が……という、まるで自転車操業の様相を呈するわけです。それでもなお、試行錯誤を繰り返してばかりなのはなぜなのでしょう。要領の悪さも手伝ってのことでしょうか。しかし、それ以上に、小難しい話をどこまでかみ砕いて説明できるかという挑戦にすっかり魅せられているからに違いありません。時には授業と関係ないことが書かれた感想に苦笑しつつ、準備に追われる日々はまだまだ続きそうです。